インタビュー　建設産業とSDGs

持続可能なまちづくり

中小こそ生き残りかけ活用を

法政大学デザイン工学部
建築学科教授
川久保 俊

地球環境の悪化などを背景にSDGs（持続可能な開発目標）が注目されていますが、建設の分野ではSDGsはどのように取り組まれているのでしょうか。持続可能な開発について関心を持ち続けて研究されている法政大学デザイン工学部建築学科の川久保俊教授にお話を聞きました。現在、川久保教授は環境研究総合推進費の支援を受けて、ローカルSDGs推進による地域課題の解決に関する研究を推進しています。（文責・見出しとも編集部）

川久保教授

SDGsの17のゴールはどれも不可分と言われていますが、建設業でまずイメージがわきやすいのはゴール11番と12番です。11番は「住み続けられるまちづくりを」です。私たちのまちをどのようにつくり上げていくか、まさに建設業界の使命だと思います。ダイレクトに関係しています。他のゴールは大体概念なのですが、11番だけ都市という空間スケールをイメージされるようなゴールになっています。そこを担えるのが建設業界です。

もう一つイメージがわきやすいのがゴール12番です。12番は「つくる責任、つかう責任」と言ったり「生産・消費」と言ったりしますが、家をつくった後、施主さんが運用するわけですが、最近問題になっているのが「つくる責任、つかう責任」の後、書いてはいませんが「解体してなくす責任」というのでしょうか、そういったところが抜けているのではないかという議論が建設業界のなかであります。

空き家などが全国的に増えていますが、建物の生産から解体まで責任をもって取り組みましょうとなれば、空き家問題もなくなるわけです。そうした意味でゴール11番、12番あたりからみてみるのが良いと思います。

他のゴールへの連環をイメージ

ゴール11番、12番あたりから取り組んでみるといろいろなところに関係してきます。例えば、省エネルギーで脱炭素のまちづくりをしようとなるとゴール7番（エネルギーをみんなに、そしてクリーンに）とか13番（気候変動に具体的な対策を）が関係してきます。スマートシティに取り組むとゴール9番のインフラにも関係してきます。環境共生都市をつくろうとなるとゴール15番の陸域の生態系を守りましょうに、健康的で快適な住まい方ができるようなまちをつくりましょうとなるとゴール3番（すべての人に健康と福祉を）に関係してきます。

いろいろなゴールに関係してきますから、今からSDGsに取り組む方はゴール11番と12番をまず見ていただき、そこからイメージを膨らませて、ここにも関係があると他のゴールへの連環を考えていただくととりかかりやすいと思います。

目標像だけでなく

ターゲットと指標に注目

SDGsは17のゴールの下に169のターゲットがあり、さらにその下に約230の指標（インディケーター）がある三段構成になっています。SDGsがよくわからないと言われますが、これは一番上の17のゴールしか見ていないからです。17のゴールは国際社会が目指すビジョンでしかないのです。169のターゲットや約230のインディケーターをみると初めてやるべきことが見えてきます。

例えばゴール3番のターゲットには心血管疾患、癌、糖尿病などを予防、治療して死亡率を減少させましょうなどと書いてあり、インディケーターにはこれらの病気で亡くなる人数を計測しましょうといったことが示され、心疾患やがんになる患者が減ってきていればゴール3番の達成に向かって前進していることがわかります。ぜひターゲットとインディケーターに目を向けていただきたい。そこまで見ていただくと、初めてこういうことをすればいいということが見えてきます。

ただターゲットとインディケーターの中には誤解しやすい部分もあります。例えばゴール11番の最初のターゲットには家に困っている人を助けましょうといったことが書かれており、具体的なこととしてスラムをなくしましょうと書いてあります。インディケーターで何を計測するのかとなるとスラムに住む人の数を減らしましょうと書いてあります。日本にはスラムはないから関係ないと思ってしまったり、これはクリアしているかと思ってしまったりすると思うのですが、それは大きな誤解です。

状況に応じてカスタマイズ

SDGsは2030アジェンダという国連の文書の中に掲載されているゴールなのですが、そこにはSDGsの位置づけが書いてあります。17のゴールは国際社会で決めたので守ってください、ただしその下の具体的なことが書いてあるターゲットとインディケーターは、各国、各地域で状況が違うので、各国政府や関係者でカスタマイズしてください、ただし